

海外通信

伊藤 猷典

希臘・伊太利巡歴から

古跡追慕の念と教育學上の興味から、今一つには藝術品觀賞をも兼ねて希臘へは昨年八月に伊太利へは本年三月巡歴した。希臘ではアテネの外、スバルタ、ミストラ、オリンピア、デルフィの廢墟を訪ね、伊太利ではミラノ、ペロナ、バドワ、ベニス、ポロニア、フイレンツ、アシバ、ローマカジノ、ナポリ、ポンペイ、ピサ、ジェノアの諸都市を訪ねた。今左に(1)教育史に現れた主要な古跡、(2)希臘、伊太利に於ける注目すべき現代の教育(3)巡歴雜感(イ)藝術價値の永遠性、(ロ)東西民族の力の比較(ハ)二、三の教育目的について)の三項に別ちて巡歴の收穫を成敗共に約説しよう。

(1) 教育史に現れた主要な古跡

スバルタ。アテネよりこの地への交通は今日にても猶不便であるが、その反面に途中にて意外の獲物もあつた。アテネを發して程なく風光明媚なサラミス灣に出で、灣に沿ふこと數時間後、コリントの運河を渡り、新コリントに着いた。ポーロで知られた舊コリントは汽車からは望むことが出来なかつたがアクロポリスの奇岩の昔ながらの姿は眼近かに見えた。汽車は更にミケネ、アルゴス其他傳説で知られた數多の古址の傍をよぎりつゝトリポリに着こゝにて宿をとりそれよりは自動車にて歴史で耳馴されたアルガデア、ラコニアの地をよぎり、案内者からはバルノン、メネライオン等の古傳説の山々を教へられ、車に戦く鈴羊に詩情を催し滿目兀々たる禿山に貧乏國の憐れを感じつゝ、走ること二時間餘り、スバルタの山タイエイトスが見えだしてより更に約四十分の後目的地に

到着した。

古代スバルタの遺跡としてはデアナの神殿の跡と、英國考古學會によりて發掘された劇場の一部（これは専門家の説によると古代スバルタのものでなくて遙か後世のものであると）があるのみであつた。案内者はタイエイトス山の山腹にあるケアダ谷を指して、これぞ往古弱い子供を捨てた谷だと教へてくれたが、傳説として聞くのが妥當のやうに思はれた。この地にも小博物館があり、發掘物が陳列されてあつたが考古學的知識の皆無な自分には何等の感興も起らなかつた。剛健質素の風を養ふために故意に使用に不便なやうに作られた巨大な貨幣（巾一尺、長一尺七八寸、厚さ一寸餘り）はこゝになくしてアテネの大學陳列室で見ただのであつた。

スバルタに遺されたものは右様のものであつたが周圍に聳え立つ八千フィート内外の山々の姿が

二千數百年の昔と變らないものどすれば、スバルタの市民達は交通こそは不便であつたであらうが朝夕に雄大な峻嶺奇峰を眺めて暮しえた幸福な民だと思はれた。無數に點在する山腹の村落を見たとき、往時も若し同様であつたとしたならば、而して所謂スバルタの兵士達はかゝる村落から出たものだとすれば勇敢双びなかつたことも肯かれた同時に自分には其後何故に名をなしえなかつたのが問題となつた。

オリンピア。オリンピアには各國より選拔された青年選手達の宿泊所、競技練習所、會議場、フイデアスの作業場、ツオイスの神殿、ネロ皇帝の別筆等古代建築の礎が發掘されて原形の儘に存し地震によりて倒れた柱も、落ちた柱頭なども其儘に置かれてあるのでありし往時の盛大さを偲ぶには十分であつたが、所謂往古の競技場はその入口と出發點の一部が發掘されてあるのみで他は二丈

餘も土に埋れてゐたので、オリンピックと聞けば直ちに競技場のみを聯想してゐた自分には心もどない感がした。

この地のかく荒廢せし所以は大地震に遇つたこと二回、山崩、洪水にあつたこと數回なりしことにもよるならんもフィデアスの作つたと稱するツオイスの神像などは侵略者の手によつて毀られたものらしい（案内者はコンスタンチン大帝がトルコへ持ち去り、こゝで火災に遇つてなくなつたと説明してくれた。）と知つたとき、こゝにも又自分には問題を提供された。

デルファイ。神殿や諸種の寶藏の礎石、柱、柱頭幾重にも取圍まれた巨大なる石垣、陳列館内に陳列された幾多の陳列品など往時の莊嚴さを語るに十分であり、しかもこの地が海拔一八八〇フィートの山腹にありて、眼下にはイラアの灣を俯瞰しうべく、周圍の山容も動いて生氣あるかの如くに

見ゆるので流石に神祕の境だと肯かれ、幾多の哲人、宰相、英傑がこゝに來て神宣を受けしことも無理からぬことゝ思はれた。

拜殿に彫まれたと稱する七箴言も今は見ることは出来ないことも、又この神域がテオドシウスにより國教統一の血祭にあげられたことも時勢の變遷で止むをえないとしても、數日前コンスタンチノープルで見た青銅蛇形柱の斷片が本來この神域に存してゐたことを思ひ起したとき、又そが往古神殿前にありし様を想像したとき、復自分は考へざるを得なかつた。

アテネ。アテネに遺された古跡の詳細をこゝでふるの必要はなからう。たゞ次のことだけを記するにとゞむ。

ソクラテスの牢獄、アクロポリスの西南方、ヒロバポス山の北麓にソクラテスの牢獄と稱するものがあり、自然の岩を切り取つて三室からなつて

ある。しかしこれは所謂であつて、信をおけないものだとのことであつた。

アカデミー。プラトールが好んで逍遙し、友人、學徒に哲學を談じたこと稱するアカデミーの跡は今も住宅地と化して境界すらも判らない。大凡この邊りと想像しうるのみであり、ソフォクレスによりて歌はれたやうな氣持は元より味うことは出来ないが、然し現在にてもリカベリテの奇峰を東方に、アクロポリスを東南に眺めえ、南方よりは絶えず涼風吹き來り學校所在地としては恰好の地と思はれた。

バルテノン、ベルベデレ、エレヒタイオン、ニケ等の諸神殿の存したアクロポリスはいふ迄もなく、市民達の會合した所謂プニツクスも、裁判所であるアレオパীগも何れも屹立した岩にてなれる丘上にあるので北にはアラネ平原を南にはエジナ灣を展望しうる勝景の地であつた。人口に四五

倍する奴隸を使役して家事其他一切の勞役に當らしめ、自分達自由民は常にこの勝景の地に集まりて、政治を論じ、哲學、藝術を談じたことを追想したとき、絢爛たるアテネ文化の發展したこともうべなるかなと思はれた。

伊太利に於ての教育史上に現はれた古跡として自分に興味あつたものはモンテ・カジノ、ボロニア、パドワ兩大學、フィレンツに存する文藝復興者の遺跡、ベデカで知つた羅馬のモンヌ・バラチヌスにある古代羅馬の教育所等であつた。

モンテ・カジノは西紀五二九年にベネチクトによりて開かれた僧庵であり、所謂中世暗黒時代に古代文化保護・傳播に多大の貢獻をなしたと傳へらるゝからには何等かの獲物があるだらうとの好奇心から、羅馬からナポリへ巡歴の途中、態々一夜をこの地に明かしたのであつたが期待は全然外れた。公使館で貰つた紹介狀を門衛に差出したら

十、四五分待つた後どう間違つたか門衛は自分を寢室へ導いた。自分は宿は町に取つてある。御寺を案内してくれと手真似で乞ふたら、次には他の案内僧が来て寺内の金ピカの裝飾を誇りげに示した。更に校長をと尋ねたが町へ散歩に出てゐるの
で遇へなかつた。圖書室内を見るべく暫く手真似で問答を繰返す内に英語を話す若僧が来た。數分前に硝子戸の外から見た圖書室へ入るべく乞ふた
が午後であり、鍵の預主が居らないので開くことが出来ず。古文書があるかと尋ねたら新しいものばかりでベネチクト存在當時のものはないと答へた。建築物で古いものはと尋ねたら土臺のやうな隠れた所に残つてゐる僅かの土塊やうのものを示してこれがベネチクト時代のものだと答へた。
更に問答を重ねやうとする内に件の若僧晩の看經にことよせて自分を置去りにして内へ入つてしまつた。目的は全然外れ、悄然として再び自動車に

乗り、類ひ稀れな周圍の眺めを俯瞰しつゝ、又只一つの僧庵のために、二千尺餘の高い山の上迄自動車を通ひうるやう開かれた善い道路を羨ましく思ひつゝ山を下つたのであつた。中世時代にあつた古文書は眞にこゝに現存しないのか、現存しないとすればどうして亡くなつたのか、又他へ持運ばれてあるのかを知りたいのであつたが、不幸にしてこれは知りえなかつた。自分はこゝへ登る數日前、アシツへ登り、運よく校長やら、教養ある獨逸僧に案内されて豫期以上の効果を收めた經驗から、次も同様であらうとの漫然たる臆測から、公使館の紹介狀以外、全くの無準備で行つたのが主なる失敗の原因であつた。

パドワ、ボロニア兩大學。現存せる歐洲の諸大學中古いものとして第一に擧げられるのはボロニア大學であり、パドワはそれ程でなくとも歴史ある大學である。普通教育史にはボロニア大學は十

二世紀にバドワ大學は十三世紀に創設されたと記されてあるが、學校の創設と同時に校舎も設立されたといふ意味では元よりない。校舎の古いことから言へばバトワ大學はボロニアのそれよりも十年早く、前者は一五五二年に、後者は一五六二—三年に建てられたものである。後者は目下圖書館として利用され、大學の授業は可なり隔つた地にある新校舎で行はれてゐる。案内者は大學内にある小さな禮拜堂や、世界で初めて人體解剖の行はれた教室だらうと稱せらるゝものなどを示してくれた。廊下に所狭きまでに掲げられた卒業生のシールドは伊太利特有のものゝやうに思はれた。

バドワ大學は今尙古き校舎を利用して行はれてゐる。ガリレオの脊椎骨の一片、用ひられた地球儀、昔人體解剖室であつたと言はれる小さなコロッシューム形の教室、廊下や講堂の壁一面に飾られた卒業生のシールドなど古典の香り高いものであ

つた。

古代羅馬の教育所の跡と想像されるものが現在も猶存することは、寡聞なる自分はこの度の伊太利旅行に際し案内書を讀んで始めて知つた。こはモン斯巴ラチヌスと稱する皇帝アウグスチヌスなどの住んでゐた丘の西の崖の所にあり、一坪乃至二坪位の小さな部屋が數個横に並んでゐる。この中から現れた *exit de paedagogio* の文字によりて教育に關係あつた場所と想像されるのださうであるが、考古學的の知識のない自分には、その眞偽の如何は判らない。これが若し眞であるとすれば教育所としての建築物は、半ば壞れてはゐるが、歐洲では恐らく最古のものであらう。

(2) 希臘、伊太利に於ける注目すべき現代の教育

希臘では公使館から紹介狀を貰つて時の文部大臣に會ひ、更に書記官に會つて教育の現狀を訊し

たのであつたが義務教育も従來四ヶ年であつたのを本年度から六ヶ年に改められるやうな程度で我々の參考となる程のものはない。只一つ耳に留まつたことはマセドニア地方が言語が異なる關係からこれ迄別種の教科書を使用してゐたのを、同地方人の希望によつて中央地方と同一教科書を使用するやうになつたといふことである。

伊太利では公使館の人にあつて訊いたのであつたがムツソリニーが出てより教育上にも大改革が行はれたといふことである。これに關する參考書三種を求めたが何れも伊語で外國語のものは皆無であるので、伊太利語の出来ない自分は今こゝで詳細を述ぶることの出来ないのを遺憾に思つてゐる。話によれば改革中の顯著な事項としては國家試験といふものを設け、公私を問はず何れの學校の卒業生もこれを受けしめることゝし、従來の公私立學校の取扱上の差別を撤廢したといふことであ

る。

義務教育もまだ六ヶ年、目に一丁字なきもの全人口の三割を有すと。

自分の伊太利巡歴の念願の一はモンテツソリー女史に遇ひたいといふことであつた。羅馬に到着後直ちに宿屋で人名簿や電話帳を調べさしたのであつたが一向それらしきものは見當らないので、公使館へ行つて匡したところ、女子は旅行ばかりしてゐて目下當地に居らず、且同女史の主義に基いて幼稚園を經營せるものはローマにはなくして、ミラノ (piazza Umiltaria I, Milano) にてコンダルマリ女史 (Sigra Condurnari) があると教へてくれた。自分は既にミラノは巡歴し終つた後であつたので、再び訪れえなかつたことを遺憾に思つてゐる。

伊太利の教育については猶一つ通信すべきことがある。それは

海上感化院カラツチオロ (Nava-Asilo "Caracciolo") である。このものに就いては嘗て下位春吉氏によりて詳しく紹介されたことがあるさうであるから、こゝでは簡單にたゞ次のことだけを述べよう。

精神病で夫君に先だゝれたGiulia Civita夫人が後半世を有意義に送らんと志し、身をナポリ市に多き不良少年の感化教育に獻げ一九一三年九月から廢艦を利用してこれが教育所とされた。現今用ひてゐる船は二回目のもので艦名は以前には Flavio Giacea と稱した。今は Caracciolo と稱す。學科は小學校程度の教育を八ヶ年で授け、午前中は學問にて午後は大工、機械、網すき、漁業などの作業を授く。卒業生は主として海軍水兵となり、なりえなきものは他の仕事に従事す。既に小尉となりしもの二人あり（一人は潜航艇の沈没と共に他界したが）現在生徒數二百五十人ありと。この艦は

平素はフザロにゐるのだがさうであるが都合よくナポリに來てゐたので親しく見るこゝが出来た。艦の機械は全部取除かれてあつて、航行の際は他の船によりて曳かれるのであり、教育所としての設備は見るべきも少なく、海國としての日本の參考に資すべきは廢艦の利用と不良少年を主として水兵に養成するといふ二點のみであつた。

(3) 巡歴雜感

(イ) 藝術價値の永遠性。藝術品が時處を超越した永遠自存の價値を有することは豫てより聞いてゐたが、希、伊の巡歴によつてそのことが一層判きりした。

自分は渡歐の直後フライブルグ市で戰勝記念像を見たとき少なからず驚いたのであつたが、一度希臘へ來て、オリンピア博物館に遺された勝利の女神(Nike of Peonios)を見たとき、それは假令部分的には破壊されて原型を留めないとは言へ、殘さ

れた斷片より發する神韻に打たれてフライブルグ市に於ての先きの讚嘆は輕蔑に變じた。希臘よりの歸途ミュンヘンへ立寄り同様の記念碑を見たときには一瞥だも與へなかつた。

蕾にこれのみならず所謂希臘式の建築特有な破風、柱、人形の柱なども同様の感を與へた。埃、獨の大都市にて、主要な建築物で希臘式のものが多いのを見た時には、近代文明を我物顔に跨つてゐる西歐人も二千數百年前の希臘の眞似しか出來ないかと侮蔑したい程であつた。

天才の手によりてなされた藝術品は後人の追従を許さず永遠に輝き、永遠に文化人の憧憬の的となる。世界の學者またこの研究に努力を惜まない聞くところによれば米國考古學舎はフィデアスの作品を探するために近く數百萬弗を投じてアテネのアクロポリスの周圍を掘返すとか。實に無情の鑿痕數萬の有情を踏使するといふべきである。美價

値の力はそれ聖にも比すべきか。

(ロ) 東西民族の力の比較。アテネの博物館中に唯一つしかない等身の青年青銅像(四世紀頃の作)の貧弱なのを見たとき、又デルフィの博物館に收めたる青銅御者の像を一瞥したゞけで過ぎ行かうとしたとき、自分の伴つた案内者が余を引留め、前に導き後を指し、上下左右隈なく指示して美なる所以を説明してくれたが、藥師寺の三尊佛などを想起した自分には何等の感興起らないのみに「君も一度奈良へ遊びに來たまへ」と言ひたい程であつた。ナポリの博物館で見たヘルクラネウムにあつた五人の舞人も成程趣はあつたがそれ程に引付けられなかつた。(これは希臘系でなくしてローマ人の作つたものかも知らないが)希臘人の殘した銅像がこれしきのものとするれば實に貧弱なものと言はなければならぬ。この青銅像の點のみから見れば我が東洋人の祖先は古代希臘人よりも

(勿論)に約一千年の開きはあるが)遙かに優れてゐたと言はなければならぬ。又假りに印度佛像の淵源が希臘彫刻にありとし、希臘が我々の師匠であつたとしたならば我々の祖先は當に出藍の才あつたものと言はなければならぬ。希臘に於て最も驚いたことは優秀なる大理石像の無數にあることであつた。羅馬に於ても同様であつたが、

けれどもこれに對しては我は奈良・平安を中心として無數にある乾漆像や木像を以て對比しえないであらうか。而して若し大理石が天然に日本に於ても希臘程に恵まれてゐたならば(今アテネにある競技場の觀覽人五萬人を入るゝに足る廣大なる座席が悉く純白の大理石で作られてゐることから見ても、如何に天然に恵まれてゐるか判る。伊太利では大理石材が我國の樺材のやうに多量に用ひられ、著名の寺は多く屋根の頂點より地下室の床に到る迄これで作られてゐる。我國では古いも

のとしては前記三尊佛の臺石か正倉院の御物の火鉢ぐらゐしか利用されてないやうである)我國にも定めし、これらに劣らぬ優秀なものが遺されてゐたに相違なからうと思はれた。

具體的な例證は暫く省かう、其他繪畫に於ても建築・土木に於ても、哲學・宗教に於ても詳細に彼此比較檢覈したならば、質に於ても決して劣らぬ優秀な文化財が東洋人の祖先によりて多量に残されてあるとの從來の想定をこの度の巡歴によりて一層信憑しうるやうになつた。

曾に過去に於てのみならず現在に於ても同様である。一步を過まれば生命を失ふと思はれる危険の地に設けられたベスピアス火山の電車に乗つた時、又瑞西で一一三四二フィートの高い所迄敷かれたユングフラウの電車に乗つたとき「ゲトーは偉いな」と一時は驚嘆もするが、我國阿里山では八千尺の高所迄汽車を敷設してゐることを思ひ

返した時我も偉いと我自らに惚れた。個々の専門の學問に於ても在留邦人の研究員の談話を綜合する時多くは同様の感を抱いてゐるやうである。

我が民族の力の一層頼もしく思はれるやうになつたことも巡歴の賜の一であつた。

(ハ) 二・三の教育目的について

自分は嘗て「教育目的としての價値體系」と題する論文に於て科學・道德・宗教・政治・經濟等の教育目的中に於けるそれ々の地位について論じたのであつたが、今にして思へばあれは餘りに抽象に失した嫌があつた。泰平無事の世にあつて外界と沒交渉な書齋内に於て概念の詮索をなすものとしては意義があるであらうが、生きた歴史の流れの中に棹し、雷に狂颯怒濤を押切りうるのみならず怪戦・凶賊をも征討しうる海國男子を教育するには更に數言を補充しなければならぬことを知つた。

自分は多年憧れてゐた歐洲文化の發祥地、希臘國內巡歴を實現し、ペロポネソス半島の交通樣關の貧弱なること、停車場の粗雜なこと、襪襪を纏ふた兒童の水をひさぐ憐れな様を行く先きくに見せつけられたとき、トリポリからスバルタ迄數十里の間、兩側の山々が殆ど禿山にて樹木らしいものゝ見えない荒寥たる様や、打壞された蜂の巢のやうな、今は廢墟のミストラを見たとき、神域デルファイより停車場に通ずる長さ二十餘里の道は世界大戰當時佛蘭西の手によりて作られたものなることを聞いたとき、又考古學的研究もスバルタの發掘は英國から、オリンピアのそれは獨逸からデルファイのそれは佛蘭西の學會の手によりてなされたことを知つたとき、永年の憧憬は漸次悲哀に轉じた。公開賭博場を許して迄も税金の多きを計つてゐる現状を目撃したとき、自らの國家の經濟が國際聯盟の手を経て列國からの借疑によりて維

持されてゐることや、他國では見られない變態の紙幣（一紙幣の四分の一片を切り去つた残りの四分の三が記載額の四分の三として通用する）も財政の窮狀を云したものであらうと駐在の川島公使から教へられたとき、先きの悲哀は更に理性に還つた。二千數百年後の今日も容易に他の追從を許さざる燦然たる文化財を出した國、プラトロー、アリストラレスの血の流れの幾分にも存すべき筈の民族がどうして斯く迄退化し去つたかの因果關係を考へざるを得なくなつた。國家・民族の永遠に榮えんことを希求する自分は、又番に退化しなきのみならず、永遠に開展しうる道を講ずることが自分の天職だと信ずる自分は、この問題について單なる無常觀では諦はつかない。人間生活の本質を彼岸の世界に置く宗教觀も飽きたらぬ、所謂民族の周期的興亡説も未だ容易に肯かれない。

希臘衰亡の眞因は何處にあつたか、その究明

は歴史家の研究に任ず。自分は教育學者として今日の希臘が自分に與へた暗示に従つて次の諸項をのべたい。

第一は經濟價値の爾餘の價値に對する關係である。前記の壞された蜂の巢のやうな廢墟ミストラとはスパルタから程遠からぬ地にある中世紀の都市である、これと獨逸にある、同じ中世紀の都、ニールンベルグが一面に中世紀の姿を保存し、他面に近代都市として該地方に於て重要な地位を現今も尙維持してゐる様を比較して、その異なる所の主なものは後者が、現在も尙工業都市として經濟的に重要な地位を保つてゐるがためであることを知つたとき「爾餘の價値の放つ光の多少は、その土臺となる經濟價値の多少に依存する」と云つた言葉の意味が一段と生きて感ぜられた。經濟價値は目的關係から言へば爾餘の價値の手段である、けれども其手投の意味は目的物さへうれば最

早必要のない踏臺のやうなものではない。家の存する限り永遠に必要な礎の如きものである。これを無視しては爾餘の文化價値の發展は望まれないフイレンツを中心として起つた文化に對するメジチイ家の貢獻はその適例ではあるまいか。金錢に冷淡なるを誇りとなすとか、清貧を禮讚するとかは、特殊の場合は別として、一般論としては我々は避けなければならぬのでないか。

第二は國家組織の文化の發展に對する關係である。經濟的にも、又爾餘の價値の發展も獨立した國家の保護なくして充分に行はれない。現代の希臘の國力の衰亡は古くは羅馬に次には土耳其政府の治下にあつた場合にあまりに誅求されたがためであつたと聞いたとき、又アテネ市が一八七〇年には人口四四、五一〇であり、一九〇七年には一七五、〇〇〇であつたのが現今では百萬と稱する迄に急に増加したことの眞因が國の獨立にあると

思はれたとき、國の獨立がその民族の消長に從つて文化の進展に寄與すること如何に大なるかの實證を示された。國家が獨立しうるためには、それ自身が充分に強固でなければならぬ。海路渡歐の途次到る先で腹立しい思ひをして見た英國の有する海軍根據地、又は防備も今では成程どうなづけられた。世界大戰に於ける獨逸の失敗を以て直ちに軍國主義の敗北となし、ヘーゲルの國家説迄も否定し去るのは早計ではあるまいか。

第三は宗教と社會生活(特に國と國との關係)との關係である。自分は教育目的としての價値體系に於ては宗教を最中心に置いたのであつた。けれども宗教にあらば爾餘のものには不必要だといふ意味ではない。

宗教は道德を内に包む、惡をもよく包容しうる況んや善をや、パンを食らば更に衣をも與へるのが敬虔者の心事である。けれどもローマ法皇の宮

殿の入口とおぼしき所には附劔の僧兵が立番をしてゐる。智恩院の御堂側にも請願巡査の詰所がある。理想の教説と現實生活とは開きがある。佛も奸邪に對しては劔を用ひなければならぬ。且常に奸邪の存することを豫想してゐなければならぬ。歐洲へ來て最も不便を感ずることは國境通過の煩鎖なことである。領事の査證、旅券、荷物検査、國によりては出國の際自分の寫眞を納めなければならぬ。右の頬を打たれば左の頬をも向けよとは提孩の兒童も知ることながら國と國との間では別の範疇に従はなければならぬ。希臘半島と小亞細亞半島とはトロイ征伐の古傳説以來今尙相反目してゐるやうだ。獨佛兩國も永遠の平和は結ばれさうにも思へない。宗教者はいふであらう。今歐洲にあるものは眞の基督教でない。然らば自分は詰問する、何ぞ除外例の多きやと、基督教を説いて二千年、今尙隣國相闘がなければ

ならないとしたならば、生存期間五六十年の生きた人間を相手としなければならぬ教育者は、更に他の道を講じなければならぬ。

自分がフライブルグにゐた時、下宿屋の主婦(大戰で夫を失ひ、インフラテオンで財産もなくした)が生活難を啣つので自分が「心配しなされるな、神様が萬事をよくして下さるから」と宥めたら、「神様は世界大戰で多數の獨逸人を殺し、其上に金迄もなくしてしまつた」と腹立しげに放言した、萬事は神の御心にありとの確たる信念を有し得るものは恵まれたる數人に限るやうである。

人はよくいふ正義が最後の勝利をうる。これが信念として内面的に働く時には我々に無限の力を與へるものであることは自分も確信し且力説もする。けれども外面的な現實の社會生活に於いては常に必しも行はれてゐるものでないことに我々は多大の注意を拂はなければならぬ。デルファイ

にあるべき筈の青銅蛇形柱が君府にあり、希臘に多かるべき筈の希臘彫刻が却つて羅馬に多きが如きともすれば現實の人間世界に於ては政治的力が正義を無視して横行する。自分は伯林新聞で「アメリカの空想」と題する社説中に引用された「アメリカ新聞」中の文句「世界平和への方法は意味のない数百の契約によるよりは寧ろ古代羅馬帝國時代になされた方法即ち何時でも直ちに決定を與へる所の有效なる劍にある云々」といふ記事を讀んだとき、この感じを一層強くした。

かくいふとも自分は軍國主義を主張するものではない。狂暴を防ぎ奸惡を征禦しうるだけの充分の力を養へと主張するのである。理想の世界が直ちに實現されない限り、堅牢なる屋根・周到なる戸締りによりて我々が住宅内に安穩に憩ひうる如く健實なる國家・強固なる戰鬪力を有することに よりて始めて、其の民族は爾餘の文化價値を意の

儘に開展しうる事が出来る。目的から言へば國家の存在は至高善實現の手段であるであらう。けれども、この手段の意味は、先きにのべた經濟の場合と同様絶對必要のもの、少くも現實の世界に於いては屋根の家屋に於けると同様絶對必要のものである。

このことに關聯して自分に問題となつたのは奮闘力の養成方法である。軍事操練・武器の精銳は第二問題である。日本民族と西歐民族との間に屢々認めらるゝ氣質上の差、單に戰爭のみならず一般の生存競争上に必要なる、諸種の氣質上の差異は如何にして彼等を凌駕せしめうるか。この點に就ては更に機を改めて研究したいと思つてゐる。

これを要するに歐洲へ來たことにより、別して希伊の巡歴によりて得た自分にどりての第三の收穫は一國內に於ての生活と列國間に處する生活とは、少くも現實の世界に於いては其の範疇を異に

する。後者に於て、よく競争に堪えうるためには單なる正義の力だけでは足りない。他の暴行を防禦し奸邪を征服するの力をも有しなければならぬ。従つて兒童の教育に際してもこの點をも能く考慮しなければならぬこと、經濟並に國家が文化價值發展に對してなす貢獻を從來よりも一層具體的に一層切實に感じたこと、善と聖の力の限界を知つたことである。(四月十一日バリー答舎にて)

寄贈雜誌新聞

(昭和三年七月八月)

哲學雜誌	昭和三年七月號	四九七號
丁西倫理會講演集	同 八月號	三一〇號
東亞の光	同 六月號	二三卷六號
精神科學	同 七月號	三卷三號
教育心理研究	同 八月號	三卷八號
生理學研究	同 七月號	三卷上
商學討究	同 六月號	三卷上
眞宗研究	同 七月號、八月號	一三號、一四號
社會學徒	同 七月號、八月號	二卷七號、八號

觀想	同人	七月號	五一號
全人	同人	七月號	二四號
學校教育	同人	八月號(體育研究號)	二五號
小學校	同人	七月號、八月號	一八一號、一八二號
静岡縣教育	同人	八月號	四五卷五號
信濃教育	同人	七月號	三七五號
奈良縣教育	同人	七月號、八月號	五〇一號、五〇二號
願慧	同人	七月號	四八四號
武藏野學院年報	同人	七月號、八月號	七年七月號、八月號
Kenno Kikumura	同人	五月刊行	第七號
		八月號	第一卷第一號

帝國大學新聞

昭和三年八月六日